

狂愛者は背徳の荆を征
く。

翠漣

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺はモノを大事に大事に隠しておく。

アイツらはいつも容赦なく俺から奪つて行くから。だから誰にも盗られないよう
に大切に大切にする。大切に大切に…隠しておくんだ。

歪んだ俺は、それ以外の守り方を知らない。それ以外の愛し方を知らない。。

俺の望みは、大切なモノと一緒に在ること。だから誓った。

俺のモノはもう奪わせない。

もしまだ俺から奪う気なら…俺だってもう容赦はしない。やられたらやり返す。目

には目を、歯には歯を。

嫌なら返せ。今まで俺から奪つたモノを。…返せないだろ？だから…ごめんね？

今から…殺り返すから。

目

次

プロローグ

プロローグ 「The sky is
too high for me to touch.」

俺の家族

回想

全ての始まり

失ったモノと得たモノ

バカとネクラと能面

偽り

37 28 19 9

6 1

1 プロローグ— [The sky is too high for me to touch.]

プロローグ

プロローグ — 「The sky is too high for me to touch.」

『生』とは何か。

では『死』とは何か。

『人』とは何か。

『他』との違いは?

『天国』はあるか。

『地獄』はあるか。

『善』とは何か。

そもそも『悪』との境界線は何処か。

『現実』とは如何なるものか。

—— 『理想』とは如何なるものか。

▣天使▣と▣悪魔▣の違いはあるか？

人に個性があるように、これらの答えも人それぞれだと思う。だから、相手の話を頭つから全否定するつていうのは、考えてみると實にナンセンスなことだと思う。

お前は、「黒に『白になれ』」、▣白に「黒になれ」▣つて言われたら変えられるのか？モノによつては話し合いや掛け合わせで変えられるかもしれない。でもよ、否定しては何も変えられないんだよ。変えられるものじや無いんだよ。紙や黒板みたく簡単にモノは染まらない。面倒なもんだよ。

そんなわけで。

俺は否定されるのが嫌いだ。よく言えば自己一貫。悪く言えば利己主義、エゴママ。でもそれの何がいけないことだ？誰だって自分が一番可愛いんだよ。自分の望みの

3 プロローグ— [The sky is too high for me to h.]

為に、それを叶える為に行動して何が悪い？別にいいじゃないか。欲するモノの為に動くことの何がいけないと言うのか。

：つて言うのが俺の持論だつたりする。

父も母も彼らも、そうだつたから。

あとは…そうだなあ。

▣家族▣と▣友人▣と▣他人▣の違い。

俺にとつての家族つていうのは、ずっと一緒にいるあたたかい存在。大切な存在。

俺にとつての友人つていうのは、互いを認め合つている存在。知つている存在。

俺にとつての他人つていうのは、無興味無関心の存在。見るに値しない存在。

だから、極論、他人は友人になれて、友人は家族になれる。ただし、他人は家族にはなり得ない。

A ≡ B、B ≡ C ではあるけど、A ≠ C つてわけだ。

俺の家族になり得る友人を、 アイツ等は憎んでいる。

だから、 俺は

教団が嫌いだ。

俺を否定する、 友人を否定する、 教団が嫌いだ。
家族を殺した、 日常を奪つた、 教団が嫌いだ。
正義を履き違えた、 理想を願うだけの、 教団が

『大嫌い』だ。

(嗚呼、 今日も)

(空は俺の手が届かないほどに高い。)

(誰か見つけてくれないか)

(誰か認めてくれないか)

5 プロローグ— [The sky is too high for me to t
h.]

(誰か知ろうとして欲しい)

(誰か理解して欲しい)

(でも、誰も)

(分かつてなんてくれないんだ)

(いつからだつたか)

(俺は世界を憎んだ。)

(俺の世界から色が消えた。)

(そして)

(俺に色をくれたのは)

(とある2人の少年だつた。)

俺の家族

俺の家族は少々特殊だ。

父はイタリアと日本のハーフ。母は純日本人。つまり俺は日本とイタリアのクォーターにあたる。

俺の一番初めの記憶はイタリアから始まる。元々は中国に他の日本人達と隠れ住んでいたそうだが、イタリア。

父と母の先祖の祖国であるニホンという国は、百年以上前に突如現れた謎の存在によつて征服され、生きていけない状態になつたそうだ。そのため、ニホンに住んでいた一部の日本人は海を越え、隣の大陸へと移り、中国に移住を決行した。そして中国の山々の中に隠れ住み、いつか帰れる日を夢見て、ニホンの血を絶やさぬよう同族同士の結婚を絶対とした。

そんなある年、イタリア人の男とその日本人の女が偶然出会い、恋に落ちた。日本人の女は一族の反対を押し切り、イタリア人の男と添い遂げようとした。男もその女を妻

にと望み、半ば駆け落ちのようだつたそうだ。

やがて2人の間には子が産まれた。夫婦はニホンの一族の隠れ住む里へ報告に行つた。女の親と同年代、年下の女達は夫婦を歓迎したが、男達や老人達は夫婦と子を迫害した。子はハーフだつた。ニホンの血統がどうのと騒ぎ立てる老人達は子を認めなかつた。だが、子がニホンの血をひいているのもまた事実。老人達は夫婦から子を取り上げ、ニホンの武術を叩き込むことに決めた。：ニホンから逃げて来られた日本人達は皆、”シノビ”や”サムライ”といった優れた武力を持つ者達だつたのだ。

やがて子は迫害されながらも、武術を仕込まれ、強く成長した。子が青年となつた頃、子は：俺の父は母と出会い結ばれた。2人もまた周囲の反対を押し切り結婚したそうだ。やがて母の腹には子ができた。俺だ。だが、2人は思つた。自分達の子も異国の血をひく雑種として迫害されないか、と。子まで同じように迫害されてはたまらんとキレた父と母により、脱走計画が図られた。協力者は村の娘や母親達。子として、あるいは子を持つ親として協力を進み出してくれたのだそうだ。

そして2人は最低限大切なだけを持つて里から脱走。父の父、つまりは内祖父の祖国であるイタリアへ向かい、移住した。

そして俺が産まれた。

俺に自我が宿った頃、父と母は俺を鍛え出した。父も母もシノビであり、サムライだつたから。俺はというと、幼い頃から2人の強さを見て、強者足る2人の息子である俺も強くて然るべきだと思つていたから、鍛えられることに特に文句はなく。父からは刀を、母からは暗器を教わりだした。

確か初めて刀を握つたのは2～3歳のとき。短刀や苦無が俺にとつての才モチャであつたのを覚えている。

不満なんて一度も思つたことはなかつた。

強く明るい父。強く静かな母。

この頃の俺は、とても幸せだつた。

回想

全ての始まり

いきなりだが、俺はアルビノとして生まれた。

要するに日光やら雑菌やらに異常に弱い。だからだろうか。父と母が俺に体を鍛えさせたのは。

俺が少しでも強くと願つたのは、俺が熱を出して倒れる度に泣きそうな顔で看病する両親を見てきたから。

それが結果的に、俺らの命を救うことになる。

「人間とは愚かなものですネエ。いつでもどこでも争いを止めない。強大な敵がいようとも、ネエ……。そうは思いませんカ……？」

ある日、こんなことを言いつつ、俺らの元に訪れた一人の太った男。俺らが、襲いかつて来たよく分からぬ機械を物理的にぶち壊し撃退した次の日だった。

当日の俺は3歳。両親の特訓のせいか非常に子供らしくない子供だつたと思う。そ

れでも、さすがに何のことかは分からなくて、ぼうと聞き流していたら：気が付けば父がその男と意気投合していた。

あの日襲いかかって来た機械はその男が作つたという。なかなかに強力らしいその機械がただの人間に壊されたことに興味を持ち、訪ねて来たんだとか。

父はぶつちやけ戦闘大好き人間だ。：いや、その実力的に人かも怪しい。（戦闘大好き以外は母も同様）

俺らを殺しにかかつて來た奴の製造元はどうして仲良くなれるんだと普通なら思うのだろうが……生憎とウチは基本的に快楽主義だ。樂しければいい。故に父は持ち前の樂觀さで男と友人になつてしまつた。流石父。

男は『この世界を終焉に導く』のが目的なのだと言つていた。汚れたこの世界を一度リセットするんだとか。……へー（棒）。超どうでもいい。

まあ、とりあえずその日から俺らとその男：『千年伯爵』の交流は始まつた。

それから数年。俺が5歳の時、母が病死した。医療法がまだ確立していない心臓の病

だつた。少しなら延命治療で延ばせたらしいんだけど、苦しいのは嫌だと母本人が拒んだ。母の最期は父が殺した。

……え、なんで父さんが母さんを殺したかつて？

父さんの持つてる刀がそういう妖刀なんだよ。斬り殺すことで殺した人を骸人形に出来る。父さんは母さんを大事に刀の奥にしまつた。刀の奥にしまうとただの骸人形じゃなくて、魂ごと残せるんだつて父さんは言つていた。
：要するに母さんはまだ生きてるつてことなのかな？刀の奥にいるだけで。まあ、その辺は俺が父さんから刀受け継ぐ日がくれば分かるだろう。

母が死んでも千年伯爵との交流は続いた。俺はロードという少女と友人になつた。ロードは俺よりもちよつとお姉さんな外見だけど、ホントはもつとお姉さんなんだつて。
：よく分かんないや。

俺は7歳になつた。この頃には、昼で日が出ていてもフードを被れば外を歩けるくらいには強くなつていた。アルビノなのに強くなつたな、俺。病弱でよく熱出すのは変わらぬけど、外を歩けるようになつただけでも成長したよね。

だから、父さんに頼まれて、買い物に出るようにもなつていた。
ある日、買い物から帰ると

父が血だまりの中倒れていた。

恐怖というよりも驚いた。あの化け物レベルで強い父が倒れている。其れだけの強者がいるのかと。あの機械“アクマ”を瞬殺する父が、千年伯爵とマトモに斬り合う父が、今血を流して倒れている。

「……子供？ 子供がいたのか。」

その声で父の周りに黒ずくめの男が十数人立っているのに気が付いた。：コイツらが父さんを殺した？

コロス。

俺の日常を壊しやがった。大切な家族を殺しやがった！許さない…！父さんを殺したつてことはかなりの強者の筈！例え俺も殺されることになったとしても…一人でも多く、コロス。

俺が裾の中に仕込んでいた暗器を握った瞬間。

「「「アクマだーーー!!」」」

外で叫び声がした。

「！ファインダーチームの声だ。」

「行くぞ！急げ！」

「少年、少し此処で待っていてくれ。」

家から男達が全員外に出て行つた。

刀。

どうせ死ぬなら、斬らなきや。父さんとずっと一緒にいるために。
母さんと同じ刀の奥にしまわなきや。

俺は男達がいない間に、父さんの部屋に行つて、刀を取つて、父さんの元に行つて…
心臓を刺した。

「…………そ、だ。それ、で…い、い。」

「…父さん？」

「ちょ、と…油断、してな。死ぬ、とこだ、つた。……死ぬ、前に…お、前が帰、つてき、
てくれて、助、かつた。」

「うん。…父さんも刀の奥でいいよね？」

「…ああ。あ、りがとう…じや、あ…またな…真皇。愛、して……」

父さんの体が魂ごと刀の中に入る。

脳内に流れる情報。

一の柩【黒野 佐左衛門】

二の柩【黒野 菊乃】

三の柩【名称不明】

四の柩 [名称不明]

五の柩 [名称不明]

六の柩 []

七の柩 []

八の柩 []

九の柩 []

十の柩 []

☒禁忌参の式☒

壱の柩 [黒野 璃真]

弐の柩 [黒野 裁戯]

参の柩 []

…これが、刀の中身ってことか。

父さんが刀の奥つて言っていたのはこの禁忌つて奴か。
ふーん…これからよろしく…

【鬼屍】

……外の戦闘音が止まつた。父の遺体がないことをどう説明しようか。……そうだ！
俺の刀【斬雨】で窓を斬りとばす。あそこからアクマが来て、奪つていつたことにし
よう。ごめんね、伯爵。

「少年！一人にしてすまなかつた……つて……？ 遺体がないぞ！」

「なんだと!?」

「少年、俺らがいない間に何かあつたか？」

「……変なのが、窓から来て、父さんを……持つてつちやつた。」

「〔〔〔〕〕〕

「くそ、まさか……アクマか!!」

「少年は何もされていないかい!?」

「……うん。」

お前らに父さんを殺された以外は何も?」

男達が目を見開き凍りついた。ふふ、あはははは。ザマアみろ。

こいつらの胸にある十字架。伯爵の言つてた“クロノキヨウダン”つて奴にそつくり!友人の敵であるこいつら、父さんの敵であるこいつら!優しくする必要なんてないよな?

その次の瞬間だつた。……全く持つて、予想外。予想外過ぎる出来事。

2つの光が俺に向かつて飛んできた。一つは鬼屍の中に入つて、もう一つは俺の中に入ろうとして…床に落ちた。拾つてみると、正方形に2つのリングが交わつた…なんだこれ?

「使徒…」

「新たな使徒だ…!!」

「少年、すまないが俺らと一緒にきて貰う」

「拒否権はない。」

「おい！急いで本部に連絡しろ！」

……。

俺は、友人の：千年伯爵の敵側に捕らえられた。
そしてこれからは：俺の自由が消える。

俺の意思は認められない。

俺の父はブローカーとして、憎まれる。

そんな事実だけが、頭の中に響いた。

ふふ…赦さない。

いつか必ず…殺してやる。

俺の野望は始まつた。

失ったモノと得たモノ

男達に最低限の荷物だけを纏めさせられ、連行された俺は、イギリスの：なんかヤバい所に建つてゐる教団本部とやらに連れてこられた。

腕を引かれるまま通されたのは、建物の最下層に近い所。いたのは白い女性っぽい何か。ソレはいきなり俺に向かつて数本の帶状の触手を伸ばし、触ってきた。本部に入つた時に両手を変な札で拘束されて抵抗も出来ないが、害意は無さそうだったから、とりあえずされるがままにしておく。

「…48…59…72…85…94。…94%だ…。適合してすぐでここまで…よほど相性がいいのか…。

…………!? イノセンスの反応がもう一つ？ 初めての事例だ…だが、シンクロ率はエラー……まだ宿つていらない

「どういうことだ、ヘブラスカ」

「クロス元帥とはまた違うのかい？」

「マリアンは、確かに二つのイノセンスを持つが…あくまでもマリアン自身がその身に

適合したのは『断罪者』だけ…。マリアは魔術の力で操っているだけだ…。

だが、彼は違う…完全に一人が二つを宿している…！だが、何か条件を満たしていないのか…二つ目の方は、反応はあつても宿つていらない…。原因は…分からぬ…。

「それで、ヘブラスカ。彼の預言は？」

「…この子はいずれ…『慟哭の変革者』に…」

「…『慟哭の変革者』…。ふむ、ご苦労、ヘブラスカ。コムイ室長、戻りますぞ。」

「…はい、ルベリエ長官…」

「待て、ルベリエ…私は…まだ、その子の名を聞いていない…」

「…残念なことに教えてくれないのでですよ。何度聞いても、何を聞いても…何も答えてくれません。」

「……！」

「…また来ますよ、ヘブラスカ。」

白い女性っぽい何かの触手が俺から離れて行く。ああ…気持ち悪かった。

長官と呼ばれる男と室長と呼ばれる男、そしてフードを被つた変な札を操る奴らに連れられ、上の階に戻る。そしてまた別の階段を降りることになった。

着いた場所は…水路っぽい見た目の船着場。

「では、頼みます。」

「「はい！」」

俺は船に乗せられ、数人の白衣を着たアジア人と変な札使い達と共に教団本部の外へ出た。

数日して、着いた場所は……中国近辺。そこに隠れるように存在した（というかこれまた変な術で隠されていた）建物の中へ連行される。

そして建物に入った瞬間に……

「……っ！」

首に手刀を入れられ、俺は意識を失った。

激痛で目が覚めた。焼かれるような、斬られるような、抉られるような痛みが左胸に走っていた。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ!!

脳がショートしそうだ。目が溶けそうだ。耳が潰れそうだ。

一瞬で喉は潰れた。声が出ない。叫べない。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ!!

しばらくして、痛みが止んだ。視界はぼやけてるし、声は耳を素通りする。でも、俺

の周りに10人程の白衣を着た人間がいることだけは分かつた。俺に何をしたのかは知らない。何を言つているのかも分からぬ。でも、俺にあの痛みを与えたのがこいつらだつてことはわかつた。

——こいつらもいつか殺そう。

ここから俺の地獄は始まつた。

毎日毎日、実験だつた。どうやらあの長官とやらが命じたらしい。

“最強の兵器を作れ”と。

ここで俺は、人ではないらしい。

兵器に成りうるモルモット。それがここでの俺の立場だ。

アルビノで体が弱くしょっちゅう熱を出すが、解熱剤は投与しても、部屋の滅菌はしてくれない。俺に死ねつづてるのか？ここに来たあの日の激痛で、左胸にはよく分か

らない刺青がある。そのおかげで傷はすぐに治るのに。熱や風邪は治らない。

毎日毎日、バカの一つ覚えみたく実験実験実験実験！

——氣の一つや二つもおかしくなる。

投薬量が注射器500を超えた頃、幻覚を見るようになつた。

投薬量が注射器1000を超えた頃、血を吐くようになつた。

投薬量が注射器1300を超えた頃、幻聴も聞くようになつた。

投薬量が注射器1×00を超えた頃、俺の手足はウマく動かナクなつタ。

投薬×ガ注×器2×0×を超工×頃、俺の×憶が×ぶように×ツタ。

投薬×注×0×ラ×工×、×ノ心臓×発作×ナツ×

投×注×ヲ×、×ハ過×吸×起×ス×

タ。

投×ガ×射×

。

あれ：俺は何ダッケ？

ある日、体が反応しなくなつた。狂いながらも自我はある。でも、自分の体なのに動かない。目も見えるし、音は聞こえるし、触覚もあるし、匂いも感じるし、味も分かる。でも、何て言えばいいのか：ガラス一枚挟んだ向こうからそれを感じるというか：自分のことだと分かつているのに、自分のことのようには感じない。

ああ、そうそう。こここの奴らに、俺はシンと呼ばれるようになつた。ブローカーという罪の子：『S I N』からとつたそうだ。俺の刀である『鬼屍』と『斬雨』は、鯉口の所を鎖と札で封じられた上で、俺に渡されている。：奪われなかつただけマシだと無理やり納得することで、怒りをどうにかやり過ごしている。

そして、何日？何年？が経つたある日。かなり久々な健康調査で判明した俺の体の異常。

その結果を見てさすがにマズいと感じたらしい白衣の奴らが、俺を引っ越しさせると言つた。引っ越しと言つても、同じ建物内の別棟らしいが。例えどう扱おうが構わないモルモットでも、俺に死なれたら困るらしい。仮にも最高

戦力に成りうる存在らしいからな。

いつものように白衣の奴に引きずられるようにして（というか引きずられて）俺は目的地へ。でも二本の刀だけは絶対に手放さない。だから余計に気味悪がられる。気にもならないけどな。

そして俺は

一人の少年に出会った。

「あのねあのね！俺はねー…アルマつてゆーんだ！
君の名前は？！」

（なんだこいつと思いつつ）

（こんな純粹な目を向けられたのはいつぶりかと）

(少し喜ぶ俺がいたなんて)

(この時は、俺自身気づいていなかつたんだ)

バ力とネクラと能面

アルマという少年に出会つたとはいえ、俺の周りは特に変わらなかつた。投薬が減り、その分適合実験が増えただけ。

年齢が近いからだろうか。何の反応もしない俺にめげず、アルマは何度も俺に話しかけて來た。

「あのねあのね、今日はね——！」

「シン、シン！ 聞いて聞いて！」

「シンも僕と同じ実験してんのだよね？？」

「シン——大丈夫？」

別に特別な訳でもない。ただただ普通のことを話して、嬉しいことがあつたら伝えて、嫌なことに不安になつて、苦しむ人を心配する。

それだけだつた。

でも、特別じやないそのそれだけのことが、俺にはとても嬉しかつた。

俺を人として扱つてくれている気がして、普通の感情を人々に向けられて、ただただ嬉しくなつた。

でも、俺の体は動かない。

アルマと出会つて数日後

仲間が一人増えた。

名前はユウ。

僕らと同じ実験体。

アルマと同じ人造使徒。

先日たまたま知つた。

ここはアジアの第六研究所で、第二エクソシストとかいうモノを実験する所だと。

第二エクソシストとは、アクマとの戦いのために適合者を人造化する事でエクソシストの人数を維持するために教団に生み出された個体で、戦闘不能になつた適合者の脳を移植された人造人間。第二エクソシストの実験は、脳を移植された個体にイノセンスの適合権が移行するかを調べるために行われていると。

しかし、胎中室にいるそれらの実験体は未だほとんどが目覚めず、今起きてているのはアルマだけ…だったのだが。

「はっぴーばーすでい、 ユウ！」

あ、 エドガー博士、 エドガー博士!! ユウが起きたああ!!」

アルマはとても嬉しそうだった。俺も少しだけ嬉しくなった。

……だがしかし。

「やめなさい、二人ともっ!!」
「落ち着け！ブレイク!!」

「落ち着こうじやないか、二人とも!!」

二人は喧嘩ばかりしていた。大抵は、アルマが話しかけて話しかけて話しかけて、ウザつたくなつたユウが毒舌を吐く。それに反応してアルマが怒つて、キレたユウがアルマを殴る。そしてアルマもユウを殴る。以下エンドレス。

「あーもう！ シンも見てないで止めてくれよー！」

“エドガー博士”

俺を唯一と言つて良いほど普通に見てくれるヤツ。此処に来てコイツのおかげで俺の部屋に滅菌処理をしてくれるようになつた。若干だが熱を出す回数も減つた。ほんの少しだが感謝してる。信じてはいないけどな。

「……」

「…なあ、シン。まだ…声は出ないか？」

エドガーを一瞥してアルマとユウに視線を戻す。

そう、今の俺は声が出ない。声帯に異常は無いことから精神的なものか薬の副作用かのどちらか、あるいは両方が原因らしいが詳細は不明。

エドガーが俺に止めろと言つてくる理由は2つ。

一つ目は、俺が単純に強いから。

封印された納刀状態で柱を斬つたら、そう言われるようになつた。

二つ目は、俺が二人の中継ポイントだから。

アルマはよく俺に話しかけて来る。最近はユウの愚痴と仲良くなるための方法を相談しに来る。⋮何の反応も返してないがな。そもそも返せないしな。

ユウも結構来る。俺が何もしないからかは知らないが、下手に喋らない空間が落ち着くのか、よく俺の側にきてボーッとしている。最近は少しだけ話しかけて来るようにもなった。

⋮と言うのを研究者達に目撃された結果、エドガーによく頼られる。

今回も同様。故に⋮

「あ、ちよっと!?!シン、待つて!!頼むから二人を止めてくれええ！」

関わらないに限る。

『コードネーム▣シン▣、再生まで約500秒。350秒程で動作可能になります。』

『聞こえるか、シン。もう一度だ。』

『セカンド検体▣ユウ▣再生まで約620秒。410秒程で動作可能になります。』

『ユウもだ。もう一度イノセンスと同調しなさい』

『サーリンズ博士!!シンはともかくユウは一度休ませた方が…!』

『何を言う!咎落ちになつていないので、まだ大丈夫だ!さあ、ユウ。もう一度だ!』

『セカンド検体▣アルマ▣心拍停止しました。再生まで約420秒。』

『大丈夫だ!セカンドなら必ず適合者になれるはずだ!』

『コードネーム▣シン▣シンクロ開始します。』

『同様にユウのシンクロを開始。』

『アルマ動作可能になります。シンクロ開始。』

ない。

皮膚の裂ける音がする。呼吸が止まり、心音が消える。血が吹き出して、五感が利か

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

どんな地獄だ。一度サーリングとかいう奴もやつてみればいいんだ。俺らの苦しみがお前らに分かるか。

何が人間の希望だ。こんな事ならアクマに一瞬で殺された方が幸せだろう。

「…………すな…………え……!!」

「…………だと…………に……!!」

今日の分の実験が終わり、胎中室に行くと二人がまた喧嘩していた。

…が、実験のキズは塞がつておらず、二人は全身から血を吹き出して倒れた。
「ちょっとタンマだ…」

「さ、賛成……」

その様子が何だか可笑しくて。

「……ぐくつ」

「「シン!?!」「

「……?」

「シン、今笑つた!?ねえ、笑つたよねユウ！」

「あ、ああ：初めて聞いたな、シンの声。」

「そんなの僕も初めてだよ！ね、シン！もつかい！もつかい笑って！？」

声、出るかな…

「……………

……………アルマ、ユウ」

「し、しゃべつたあああああ！！」

「アルマうるせえ！」

「……………あはは、二人、仲良し。」

前みたいには喋れない。前みたいには表情も動かない。
でも、俺はこの日、教団に来て初めて

笑つた。

(エドガー博士、エドガー博士!!さつきね、シンが喋つたんだよ!!)
(なつ!?そ、それはホントかい!?シン！声が戻つたのか!?)

(……バアカ)

(ほ、ホントだ…シンが…シンがあああ!!)

(エドガー博士うるさい!)

(さつきテメエもそうだつただろうが。)

(え。)

((みんな似たようなもんだろ))

偽り

声は戻つても俺の地獄は続く。

毎日毎日、イノセنسとの適合実験。元々のアルビノの虚弱体質と鬼屍に宿つたイノセンスによる負荷、そして度重なる実験とその失敗による強制的な再生によつて、俺の身体はボロボロだつた。

吐血なんかは日常茶飯事。心臓に痛みが走り、過呼吸を起こし、高熱を出して、意識を失う。アルマやユウがいたとはいえ、俺は死にかけていた。でも辛うじて死なないのはアルマとユウのおかげ。アルマとユウがいてくれるから、俺はまだ潰れないでいられる。ありがとう、二人とも…。

——だけど、最近、ユウの様子がおかしい。

頭痛を訴え寝坊したり、誰も居ないところに話しかけたり、夢見が悪いのか夜に何度も目を覚ましたり。
心配だ。

そしてその日は訪れた。

その日はユウの様子がいつも以上におかしくて、辛そうで。だから早くユウのところに行つてあげたくて。だからただ願つただけなのに。

“早く…こんな実験終わつてしまえ”

なんで今適合した

どうして今なんだよ…

「せ、成功だ!!」

「やつと…やつと完成した！」

「イノセンスを2つ宿した薬漬けのバケモノ…ふふ、これまでまた我々の勝利に一步近づ

いたのだ！」

「我々は間違つていなかつた!!」

俺はこの日、もう一つのイノセンスと適合してしまつた。
即座に動き出した研究者達。

待てよ…とりあえずユウのところへ行かせろよ…

今日のユウは苦しそうにしてたんだ！ちゃんと帰ると約束したんだ！おい！

「シン…」

下に降りて来たのはエドガーと数名の鴉。

「君を…」

苦しそうに顔を歪めてエドガーは言つた。

「…ただちに本部へ送ることになつた。」

嗚呼、俺はいつから約束を破るような奴になつてしまつたんだろうか。ユウとアルマと約束したのに。3人でいつか外へと。3人で自由になろうと。3人で…一緒に頑張ろうと、約束した。なのに俺は：またダメなのか。

「シン…少しだけ、時間を貰つたんだ。何か2人に伝えたいことがあるなら…僕で悪いけど聞く。」

「2人に伝えること……。ならば。

「エドガー、耳、貸せ」

疑問符を頭に浮かべながらエドガーは耳を傾けた。

「ホントは今日、あの2人にだけ、教える約束。でも無理、だから…特別お前にも教えてやる。だから、あの2人以外、絶対内緒。」

「…分かった。何かな？」

「…」

“俺の名前、マオと言う。”

「!!シン、それってまさか!?」

「いい、絶対だから。」

そうして俺は、ここに来たときと同じように札で拘束されて、本部へと連れていかれた。

——2度目だ。

こいつらのせいで大切な者と引き離されるのは。

——嫌いだ。

僕と父の生活を壊し、父を死に追い込み、ユウとアルマとの毎日を嘲笑つたこいつらが嫌いだ。憎くて仕方ない。

——だから隠した。

俺の本名を呼ぶのは、伯爵達とユウとアルマだけでいい。

イノセンスと鬼屍の能力も偽ろう。

いつの日か来るべき日に、奴らに思い知らせる為に。

本部に連れ戻された俺を待っていたのは憎悪と侮蔑、嘲笑の視線だった。

「あれが新たな使徒ねえ：」

「なんでもイノセンス2つも持った調整体だと。」

「噂で聞いたけどあれの親、ブローカーだつたらしいぜ」

「は？まじかよ！人類の裏切り者のガキかよ」

「なんであんなのが使徒に選ばれたんだか：」

「どうか。こいつらには父と母が裏切り者に見えているのか。友人と言うだけで、死んだ人の情報なんて話したことはない。ただ酒を飲み、飯を食い、語らい合つただけの関係。それすら裏切りになるというのか。」

「フードを被っているおかげでまだマシではあるが、視線がウザイ。早く目的地についてくれ。」

しばらく歩かされて着いたのは会議室だつた。

入れという偉そうな声が聞こえて鴉は俺を中に入れた。

「やあ、始めまして。新たな使徒。私の名前はマルコム・C・ルベリエ。これから君がエクソシストとして働くこの黒の教団の長官をしている。どうぞよろしく。今日ここにいるのは教団の支部長達だ。今から君にいくつか質問をする。全てに正直に答えるようだ。」

「面倒だ。てゆーか…ふーん、こいつらが上層部つてワケか。全員の顔を脳に焼き付ける。忘れない。絶対に忘れない。必ず殺しに行つてやる。」

「返答がないな。私達は言わば君の上司にあたる。今日は見逃してあげるが…以後気をつけるように。それでは質問を始める。先ほども言つたが、全てに正直に答えなさい。」

「…無駄な時間が始まつた。なんかもう面倒だし、言いたいこと全部言つてやろうと思う。」

「…ほとんど全員の目が鋭くなつた。」

「では、私から。君の出身地は何処だ。」

「…住んでたの…イタリア」

「住んでいたの、とは？」

「…人種的、ニホン、イタリアのクオーター」

「…なるほど。」

「では次は私から。君の両親は働いていたかね」

「…是。」

「…職業は？」

「…父、包丁作る、売つてた。母、フーラワー・デザイン。」

「!? そ、そうか。」

「では次は私が聞きます。君はとても運動能力に優れていたと聞いた。何かスポーツでも？」

「…否。父と母、元々戦闘に優れた血筋。最低限の護身術、2人から習つた。」

「そ、そうなの…」

「では次は私が。单刀直入に聞くが…君の両親は太つた怪しい男と知り合いだつたか？」

「…是。」

「…話していた内容は覚えているかね？」

奴らが息を飲んで俺の回答を待つ。

「…確かに流行りのスイーツの話、それと、ダイエットの話…」

「「「「…はい？」」」

「…だから。流行りのスイーツとか、ダイエットについて、来る度に三、四時間。」

「…それは本当かね？」

「…逆に、嘘ついてどうする。少なくとも、お前ら危惧するような話、していない。」

「ほう？ 何故かね？」

「初めて会ったとき、確かに誘われた。でも父が…」

「君の父君が？」

「… “ちょー興味ない” つて…」

「「「「…」」」

謎の沈黙が降りた。